

自然共生河川研究所(岐阜分室)だより

岐阜分室研究第三部次長 梅谷内 信夫

岐阜分室は(財)ダム水源環境整備センター岐阜分室と一緒に「自然共生河川研究所」の名のもとに、お互い協力しながら、人間生活と調和のとれた自然豊かな川づくりへ向けて研究を進めていくことにしており、東海地区の学識者、行政、業界(コンサルタント、水辺関係のコンクリートブロック製品製造業者)の方が参加し、会を進めています。

今回は、去る6月12日に名古屋で「鳥」をテーマに実施しました研究会について報告します。

まず最初に、名古屋聖霊短期大学の小笠原昭夫先生に「河川と野鳥」という題で講演をしていただきました。

鳥も他の動物と同じように、この世に生を受けた以上その使命として、一つは病気になったり、天敵に食われることなく寿命を全うすることであり、二つ目は自分と同じ種の新しい個体を残す種族の維持である。このような観点から河川のもつ機能を見ると下記のことが考えられる。

餌場としての機能...水鳥が主体であるが水鳥以外にも利用している

水場としての機能...水呑み場、水浴び場として利用
避難場、ねぐら場としての機能

営巣場としての機能

渡りのルート、移動ルートとして利用

等がある。

これらの機能のうち餌場としての利用を見ると、

- ・水に浮んで水中の餌をとる鳥は、足が短く、口ばしも比較的短い
- ・水辺で餌をとる鳥は、足も口ばしも一般的に長い

そして、それぞれ取る餌も違うものを取り、取り方も違う。そうすることによって同じ餌を求めてけんかすることがほとんどないようになっている。

また、営巣地について見てみると、水の上に巣をつくるカイツブリや、水のすぐ脇に巣をつくるマガモ、川岸の草のはえていない場所に巣をつくるコアジサシ、草地ではヒバリ、草地ではセツカ、アシ原ではオオヨシキリなどが好んで巣をつくります。

高水敷の低木にはホオジロ、高木にはサギが巣を作ります。その他オシドリは木の洞に巣をつくりふ化したひなは木の上から自分で下に落ちるので、下が水か、水に近いところに営巣します。

また、カワセミは水に近い崖に巣を作りますし、オオルリやキセキレイは岩のくぼみに巣を作ります。

このように裸地から崖地まで、あらゆる場所を営巣地として使いますので、あらゆる要素が河川に残るようにしてやるのが鳥にとって大切なことである、という主旨の話でした。

話題提供としては、建設省木曽川下流工事事務所の平光文男氏から「長良川の試験対策地等における鳥類モニタリング」と題して、ヨシ原造成地や、なぎさ造成地と、元々存在していたヨシ原等での鳥類生息の経年変化について報告していただき、また、リバーフロント整備センターの菊池透から「鳥の目から見た河川環境の評価手法」と題して、河川区域の諸々の状態(開放水面、砂州、閉鎖水面、湿性草地、乾性草地、樹林地、構造物)を利用している鳥に着目して、河川の管理方式(保全、共生、利用)の設定を試みようとする研究を発表しました。

河川の生態系を考えていく場合、魚は水がなければ生存出来ません。植生は水辺、高水敷等その状況に合った植物が生えており、議論がしやすいところがありますが、飛来してくる鳥に対しては、河川外の対応と密接な関係があり今後共広い視野にたって研究を続けていきたいと考えています。

